八戸工業大学　国際交流紹介　その２

八戸工業大学・国際化ワーキンググループ

2018.10.1

セッション司会をする佐々木幹夫先生

セッション発表者（右から２番目が葛西さん）と司会の佐々木先生（左から２番目）

会場前のシンガポールの街の様子

①　佐々木幹夫教授、土木建築工学科の学生が国際会議で研究成果発表（シンガポール）

土木建築工学科の佐々木幹夫教授（専門は水工学）、及び土木建築工学科４年の葛西美琴さん、柿崎志歩さん、久保田桃加さんが、本年８月 28 日から 31 日にかけてシンガポールで開催された国際会議（2018 International Research Symposium on Engineering and Technology）でそれぞれ研究成果の発表を行いました。佐々木先生は、河口では海水が陸に向かって這い上がっており、その遡上海水の動きを理論的に予測できるという内容の発表を行うとともに、セッション司会も務めました。また学生の一人、葛西さんも同じセッションで、三沢の海岸では激しい侵食が起こっていたが、県の侵食対策工法の効果により、安定化し、侵食が止まっているという内容の発表を行っています。葛西さんは、シンガポールについて、「初めての海外で、一人で入国するのに不安もありました。でもシンガポールはアジアの中心と呼ばれるくらい大きな都市。空港では多言語表示の看板や、マルチリンガルな空港職員がいてスムーズに入国できました。様々な人種、民族が暮らしていて活気のある印象でした。」と語っています。現地での使用言語だった英語についても、「英語での論文発表も上手くできました。海外を一人で旅することにも少し自信がつきました。今後は英語をもっと勉強したいです。」と抱負を述べています。今回発表した論文は国際英文ジャーナル誌掲載論文の候補となっているため、現在は掲載をめざして英文論文の原稿作成に取り組んでいるそうです。

②　社会基盤工学専攻の盛さんと小笠原さんが国際会議で研究成果発表（韓国）

大学院工学研究科社会基盤工学専攻博士前期課程２年の盛健太郎さん（八戸北高校出身）と同１年の小笠原亮介さん（八戸工業高校出身）は、今年９月 16 日から 21 日に韓国ソウル市で開催されたジオシンセティックス材料を用いた研究に関する国際会議（11th International Conference on Geosynthetics）で研究成果の発表を行いました。ジオシンセティックス材料とは土構造物の安定化を図るため、地盤中に配置する面状、棒状、帯状、パイプ状などの高分子の繊維製品やプラスチック製品のことです。盛さんと小笠原さんの発表論文は、それぞれ、ジオセルを用いた越流に対する粘り強い堤防構造、ジオセルと断熱材を用いた切土凍上抑制工法についてでした。ジオセルとはハニカム構造を形成する高密度ポリエチレン製版のことで、内部に砕石等の充填材を詰めることで強度のある構造体を形成します。盛さんと小笠原さんは、日頃から本学英語教員の支援を受けながら、様々な学習機会を通して学術交流のための英語力アップに努めました。７月にはアメリカから来学したダイアナ・アマド教授より英語でのプレゼンテーションのノウハウについて指導を受け、８月には大阪所在の外資系機械メーカーの代表取締役だった、日系アメリカ人アート・ツバキ氏と懇談し、国際ビジネスにおけるエンジニアの在り方について助言を受けています。発表を終えて、盛さんは「英語でのコミュニケーションがやはりネックだと感じました。聞かれたことに即座に回答できるような練習もしていきたいです。」と、小笠原さんは「英語での発表は緊張感が違いました。もっと英語を勉強していきたいと強く思いました。」と語っています。

アマド先生の指導を受ける盛さん

アート・ツバキ氏との懇談で

ソウルの会場での盛さんと小笠原さん（写真右）

迫井裕樹先生

授賞式の様子

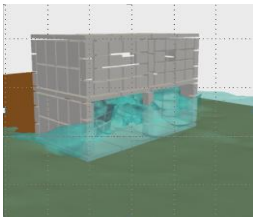
国際会議参加者（上の写真２枚は YRGS2017 関連サイトより）

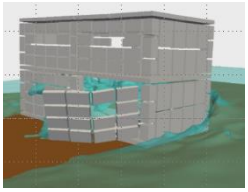
③　迫井准教授、コンクリート国際会議で最優秀論文賞に輝く！（東京）

土木建築工学科の迫井裕樹准教授（専門はコンクリート工学）は、昨年９月７日から８日にかけて東京で開催された ACF（アジアコンクリート連盟）主催の若手研究者と大学院生のための国際会議（the 8th Asia Pacific Young Researcher & Graduate Symposium(YRGS2017)）で研究成果を投稿し、最優秀論文賞（Best Paper Award）を受賞しました。論文タイトルは「Fire Damage Assessment of Concrete Using Air Permeability（表層透気試験を用いた火災によるコンクリート損傷の推定）」。国内で行われたアジア圏の国際学会でしたが、発表は全て英語で行われました。迫井先生は受賞後、「火害の劣化診断は非常に難しいです。非破壊で火害診断・推定を行えれば、その後の補修・補強・維持管理に有意義となります。研究を継続し、精度を高めたいです。」と語っています。今後は、他の研究機関と共同して、実構造物を想定して、評価・診断とともに、造性能（残存耐荷力）の検討も行う予定とのことです。

④　高瀬講師、国際会議で津波災害の減災・防災関係の研究成果を発表（アメリカ合衆国）

土木建築工学科の高瀬慎介講師（専門は計算工学）が、本年７月 22 日から 27 日にかけて米国ニューヨークで開催された国際会議（13th World Congress in Computational Mechanics）で研究成果の発表を行いました。これは２年に一度行われる計算力学の国際会議で、今年の参加者は約 3700 人、日本からも 200 名程度の参加があったそうです。高瀬先生は、これまで自然災害の減災・防災を目的とした数値シミュレーションを行っており、今回の発表テーマは津波瓦礫による衝撃荷重についてでした。参加したセッションでは、海外の高潮やハリケーンの解析事例の発表が多く、先生の津波に関する研究発表は多くの参加者に興味を持っていただけたようです。会場はマンハッタンの中心部タイムズ・スクウェアの目の前にあるホテルで、テレビで正月によく見るカウントダウンの大型ディスプレイを見ることができたそうです。またオプションツアーでは、本場ブロードウェーのミュージカルを見ることができ、感動したとのことです。同会議は２年後にはパリで、４年後には東京で開催される予定であり、今後も研究成果を出して参加したいと抱負を語っています。





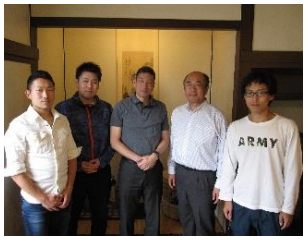
津波による建物の破壊を考慮したシミュレーション結果

高瀬慎介先生

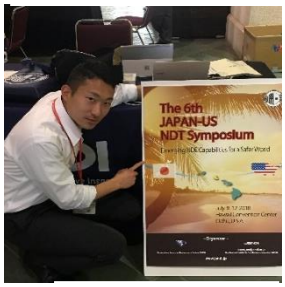
会場から撮影したタイムズ・スクウェア

プレナリーレクチャー（基調講演）の様子

ハワイ渡航を間近に控えてアマド先生と最終調整する坂本さん



アート・ツバキ氏との懇談会で、他の社会基盤専攻の仲間たちと



ハワイの会場にて

シンガポールの会場にて

⑤　社会基盤工学専攻の坂本さん、今夏２つの国際会議で研究発表（ハワイ、シンガポール）

大学院工学研究科社会基盤工学専攻博士前期課程２年の坂本光志さん（八戸工大一高出身）は、今年７月７日から 12 日に米国ハワイ・ホノルル市で開催された国際会議（the 6th Japan-US NDT Symposium）、及び８月 28 日から 31 日にシンガポールで開催された国際会議（the 43th Conference on Our World in Concrete & Structure）で研究成果の発表を行いました。発表論文のタイトルは、日本語にするとそれぞれ「コンクリート表層部脆弱層における非破壊試験の適用性」、「型枠側面における脆弱層形成に及ぼす部材高さの影響」でした。坂本さんが国際学会で発表するのは今夏が初めてでしたが、日頃から本学英語教員の支援を受けながら、様々な学習機会を通して学術交流のための英語力アップに努めてきました。７月にはアメリカから来学したダイアナ・アマド教授から英語でのプレゼンテーションのノウハウについて指導を受け、８月には大阪所在の外資系機械メーカーの代表取締役だった日系アメリカ人アート・ツバキ氏から国際会議での発表後の質疑応答でのマナーについて助言を受けています。２つの国際会議での発表を終えた坂本さんは「出発前に、事前対策としてたくさんの方々に英語のご指導を頂いた甲斐もあって、発表は無事に終えることができましたが、質疑応答に課題が残りました。しかし、あのような国際会議で発表すること自体、貴重な経験となりましたし、世界各国で行われているコンクリートへの取り組みや日本とは違う文化についても知ることができ、非常に勉強になりました。今後も研究を継続し、コンクリートの品質向上に貢献していきたいと思います。」と抱負を語っています。

国際会議で表彰される小坂谷先生（写真右）

小坂谷先生の講演の様子

国立台北科技大学のキャンパスで

⑥　小坂谷教授、国際会議へ招待講演（中華民国）

システム情報工学科の小坂谷壽一教授（専門は音楽情報科学）は、昨年 12 月 21 日から 24 日にかけて中華民国（台湾）台北市で開催された国際会議（2017 International Conference for Top and Emerging Computer Scientists）で伝統音楽（津軽三味線・南部三味線等）保存用自動採譜装置に関する研究について招待講演を行いました。小坂谷先生は、伝統音楽の保存用に三味線を弾けば自動的に譜面化する技術の開発を行ってきました。会場となった国立台北科技大学コンベンションセンター（現地では「集思北科大會議中心」と記すようです）で行われた招待講演は、参加者の関心が高く、好評だったようです。なお譜面のない民族楽器は台湾でも数多くあることが判明し、小坂谷先生は、伝統音楽の譜面化のために自動採譜技術を、日本国内ばかりでなくアジアの他の国々でも適用できるのではないかと感じたとのことです。今後の予定としては、今年 12 月にタイのバンコックで研究成果を発表することになっているとのことです。

⑦　今出准教授、インドの新旧都市で多文化共生、都市計画変遷の現地調査（インド）

創生デザイン学科の今出敏彦准教授（専門は公共に関する法哲学・倫理学）は、本年８月 17 日から 24 日にかけてインドの都市部を訪問し、多文化共生の現状と都市計画の変遷についての現地調査を行いました。今出先生は、研究テーマの１つとして、人材育成の可視化と産業再活性化を進めるため、大学を拠点としたインフラ社会システムのプラットフォーム構築を計画しています。この度、インドのデリーとチャンディーガルを訪問し、現地の多文化共生の現状と都市計画を調査し、２つの都市の比較を行いました。デリーはかつて首都だった国際都市で、人口が多く人種も様々で、多様な宗教や価値観を持ちながら、寛容と共存への努力が払われているようです。一方、チャンディーガルは戦後に作られた新しい都市で、富裕層・知識層が多く暮らし、近代的で計算された美しい景観を保っていますが、今出先生は生活感に乏しい印象を受けたとのことです。この比較研究は日本の地方都市の産業活性化の参考になると期待されており、今後の予定としては、来年８月に再びインドを訪れて村の暮らしに注目した追加調査を行うことになっているとのことです。

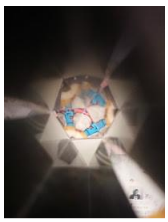
今出敏彦先生

チャンディーガルの有名なキャピタルコンプレックスのうちの合同市庁舎

デリーのラールキラーというムガール帝国時の王宮

秋田公立美術大学訪問途中で、ソリアーノ氏と、同行した創生デザイン学科３年寺井隆太朗さん

ワークショップの様子



作成した小道具とそれを使った万華鏡的な映像作品

国際会議の参加者（東方先生は前列右から二人目）

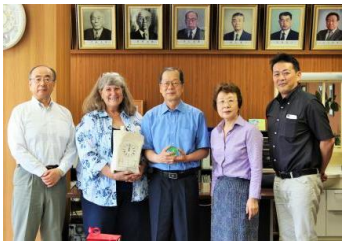
国際会議の発言する東方先生（写真中央）

⑧　東方講師が八戸でアーティスト・イン・レジデンスをスタート（八戸、フィリピン）

創生デザイン学科の東方悠平講師（専門は現代美術）は、昨年度、八戸を拠点にアーティスト・イン・レジデンス（AIR）をスタートさせました。AIR は、国内外の芸術家等が訪問先に一定期間滞在し、様々な交流を通して創作活動等に有益となるプログラムを提供する事業のことです。今年３月にはフィリピンのビジュアル・アーティストであるジェローム・ソリアーノ氏を招き、同月７日にはトークショーを開催し、八戸についての印象を語っていただき、これまで制作した作品の一部を紹介していただきました。また３月 25 日にはソリアーノ氏によるワークショップを開催し、参加者は万華鏡のような効果が得られるレンズを作り、それを使って写真や映像を撮影しました。一方、東方先生は４月 20 日から 22 日にかけてフィリピン・ロハス市で開催された国際会議（The Southeast Asian Art Residencies Meeting 2018）に参加し、研究成果の発表を行いました。東方先生は、訪問先について、「日本で当たり前なことが他の国ではそうでない面白さを味わえた。」と語っています。今後の予定としては、今年 10 月にフィリピンとイギリスからアーティストを八戸に招いて、ワークショップ、レクチャー等を開催することになっているとのことです。

⑨　米ミズーリ工科大学アマド教授、工大生に英語の指南、地域との交流も（八戸）

米国ミズーリ工科大学のダイアナ・アマド教授（専門は歴史学）が、本年７月１日から６日まで八戸に滞在されて、本学の英語教育、国際交流活動の活性化のために様々な支援をしてくださいました。アマド先生の本学訪問は３年前に次いで２度目。今回は、１～３年生の英語の授業を参観した後で担当の英語教員とティームティーチングを行ったり、基礎教育研究センターの公開講座「異文化理解・国際交流セミナー」で米中西部の地方都市での学生生活について講演を行ったりしてくださいました。また、国際会議に出席して英語による研究発表を行うことになっている工学研究科の大学院生たちに英語プレゼンテーションの個別指導を行ったり、オナーズ学生と英会話をしたり、限られた時間の中で英語の特別指導に積極的に取り組んでくださいました。一方、アマド先生は南部せんべいが大好物ということで、過密スケジュールの合間を縫って、市内の南部せんべい製造工場を見学し地域の方々とも楽しく交流されました。先生は「学生たちは素晴らしく、指導するのが楽しかったです。またお会いしましょう。」と言って、アメリカへ向かわれました。学生たちはアマド先生との交流体験を通して英語を身近に感じたようで、中にはアメリカに戻った先生に自主的にメールを送ってやりとりする者も出てきました。



長谷川明学長、橋本都副学長、本学英語教員とともに

主題別ゼミナール「科学英語」で日本史・科学技術導入史を講演

英語コミュニケーションの授業で自己紹介

オナーズ学生と英会話の後で

異文化理解・国際交流セミナーで

市内南部せんべい製造工場にて

キャンパスツアーにて

地域文化紹介コーナー

缶バッチデザイン制作コーナー

書道体験コーナー

学生食堂で一緒に昼食

小坂谷先生の三味線演奏鑑賞

⑩　三沢米軍基地内エドグレン高校生との異文化交流（八戸）

昨年 12 月８日、本学では、三沢米軍基地内のエドグレン高校の生徒たちを招き、異文化交流プログラムを実施しました。エドグレン高校からは生徒、保護者、引率教員合わせて約 20 名が参加しました。長谷川明学長による歓迎の挨拶で始まり、キャンパスツアー、ワークショップ（書道体験、地域文化紹介、缶バッジデザイン制作）、ランチタイム交流、そして最後に本学小坂谷壽一先生による三味線演奏鑑賞が行なわれました。本学からは感性デザイン学科（現創生デザイン学科）21 名の学生が参加し、それぞれのワークショップでは英語を使っての指導・支援を行い、交流を深めました。また、システム情報工学科の小坂谷研究室所属の学生たちも、閉会セレモニー及び三味線演奏の会場設営を支援してくれました。学生たちからは、また交流活動に参加したい、英語をもっと勉強したい等の感想が寄せられ、アメリカ人高校たちからも楽しかったという感想が届いています。

⑪　トロント語学研修（カナダ）

本学では昨年度から海外研修をカナダで実施しています。期間は学生によって異なりますが、２週間から約１ヶ月です。学生はトロントにある ILAC（International Language Academy of Canada）という語学学校に通い、授業はもちろん全て英語で受けました。今回の研修に参加したシステム情報工学科の落合佳祐さんは「最初のうちは何を言っているのかわからなかったけれど、３日もすると耳が慣れて大体理解できるようになりました。」と語っています。週末の観光では、トロントのシンボルであるＣＮタワーやナイアガラの滝などを見学できたようです。トロントは碁盤目のような街の作りになっており、電車が十字に走り、バスが駅付近から出ており、バスから電車、電車からバスへの乗り継ぎ等で、どこまでも一定金額の運賃で行けるので、公共交通に関しては非常に便利だったとのことです。同じ研修に参加した土木建築工学科の高山覚至さんは「街並みは、自分が八戸出身ということもあり、高層ビル群や大規模な住宅地など、海外ドラマで見るような光景を見るたびに、感動をおぼえました。」と語っています。

研修仲間と落合さん（写真右前）

ナイアガラの滝

トロントの夜景

研修仲間と高山さん（写真中央）